

## 地を割るポセイドン —— 『エイコネス』 II.14, 16, 17 ——\*

山口 京一郎

3世紀のエクフラシス集である大フィロストラトス<sup>(1)</sup>『エイコネス』<sup>(2)</sup>II.17「島々(NΗΣΟΙ)」は島々を描いた絵画の解説部分である。そのII.17.4(3・4番目の島)において、かつて1つであった島が、分かたれて2つの島になっていることが語られる。語り手<sup>(3)</sup>は、絵の中で2つの島の隙間の凹凸が一致することを少年に見て取らせたうえで、かつて地震で形成されたとされるテッサリアのテンペ溪谷を例示し、この2島もまた地震で分かたれたものであることを示す。またこの3・4番目の島についての記述部分ではポセイドンに直接言及されていないものの、これに先行するII.14「テッサリア(ΘΕΤΤΑΛΙΑ)」、II.16「パライモン(ΠΑΛΑΙΜΩΝ)」、II.17.3(2番目の島)では大地や山を割るポセイドンについて語られていることとの関連から、II.17.4にはポセイドンの権能の伏流を想定できる。

本稿は、上記の4箇所におけるポセイドンと地勢変化の記述について、当該部分の構成をポセイドンに中心を置く視点から明らかにすることを目的とし、またそこで『エイコネス』が提示する地勢変化への理解を指摘する<sup>(4)</sup>。すなわち、叙述と構成の分析から、上記4箇所を関連する記述と捉え、そこから『エイコネス』当該箇所におけるポセイドンの二面性を、とりわけ地震の「激しさ」と、時間軸を長期に取って見たときの「恵み」のあらわれに着目して明らかにする。

『エイコネス』の場面設定は、序文での状況説明(proem.4-5)によると次の通りである。ネアポリス郊外に滞在中の語り手が、そこにある4つか5つの区画を備えるストア画廊で、若者たちに、とりわけ家主の息子である10歳の少年に向かって

絵画を解説していく。語り手は少年に対する語りかけを通じて、ひとつひとつの絵画を詳細に叙述する。Bryson によれば<sup>(5)</sup>、ルネサンス期からポンペイとヘルクラネウムの発掘がなされるまでの間、ローマに残る絵画断片を除けば、『エイコネス』が古代の絵画を詳細に伝えるほとんど唯一の源泉であった。古代絵画についての知見が深まった現在でも、古代の絵画館と絵画観、絵画と鑑賞についての情報を多く含む重要な資料である。

既に『エイコネス』には3つの特徴が指摘されている。すなわちフィロストラトスのソフィスト的な視点ないし叙述<sup>(6)</sup>。ネアポリスを舞台にしてローマ的ではなくギリシア的あるいはヘレニックな視点から行う絵画解説<sup>(7)</sup>。語り手が子供相手に行われる点<sup>(8)</sup>、である。これらの前提から、教育的な側面も持つ『エイコネス』が、3世紀のローマ世界においてポセイドンに関連する地勢変化をどのように解説したかを考察することで、地勢変化に対する理解の一端が明らかになるであろう。またその際には、『エイコネス』が、絵画の鑑賞という観点からは、語り手が絵画を1点ずつ解説するという形式をとりつつも、後述の通り各絵画の相互参照的な鑑賞を行っている<sup>(9)</sup>ことが大きな手がかりとなる。

以下、まず『エイコネス』における地を割るポセイドンと地震についての各記述、すなわち「テッサリア」、「パライモン」、および「島々」の2番目の島と3・4番目の島をそれぞれ見る。続いてそれらの構成上の連関を検討する。

## I. 『エイコネス』における地を割るポセイドンの記述

### I.1. 「テッサリア」(II.14.)

「テッサリア」が扱うのは、テッサリア形成譚を描いた絵画である。ポセイドンが山を割ろうとしている（あるいは割った）場面を描くこの絵について、語り手はまず背景を説明する(II.14.1)。すなわち、これはエジプトを描いた絵に見えるかもしれないが、テッサリアの地が出現するところを描いており、平坦な大地を山脈がぐるりと囲んでいるせいで逃げ場のない河水が洪水を起こしているため、ポセイドンが水の逃げ道を作っている。

ポセイドンは三叉の矛で山々を砕き割って (ρήξει)、河の通り口をこしらえるだろう。(II.14.1.)<sup>(10)</sup>

実際に絵画の中ではこれが行われている最中である。

〔ポセイドンが〕山を割り貫くために (ἀναρρήξαι) 手を挙げた一方で、山々は、一撃がくだる (πεπλήχθαι) 前に、河に十分な幅に分かれている (δίισταται)。(II.14.2.)<sup>(11)</sup>

この、ポセイドンが山を割ろうとしている一方で、山は既に割れているという、矛盾するような画面は、画家の表現技法 (τὸ ἐναργές τῆς τέχνης) で「ポセイドンの右半身は、同時に引き戻りつつも前に出つつもあり、一撃の威圧を、単に手でだけではなく、全身で保っている」と説明される (II.14.2)<sup>(12)</sup>。すなわち、矛を打ち下ろす動作が単に右手だけのものではなく全身運動として表現されていることで、三叉の矛を持って振り上げられた右手を含む右半身が、矛を振り下ろす最中とも、振り下ろす前の準備動作としての振りかぶりとも見えるように描かれている<sup>(13)</sup>。この体勢の描写は山々に一撃を加える一連の動作を含む時間的広がりを感じさせ、したがって画中の山々が既に開いた状態で描かれていることと対応する。

ここで語り手は、画家が「深い青色でも、海の神としても描いておらず、大地の神として描いている」(II.14.2)<sup>(14)</sup>と指摘する。加えてフィロストラトスは、この絵画のポセイドンを山を割る厳しいだけの存在として提示してはいない。語り手はポセイドンの描かれ方を、「まるで海のように広く平坦であるのを見て、たしかに彼は大地を歓迎している (ἀσπάξεται)」(II.14.2)<sup>(15)</sup>と、ポセイドンの大地への眼差しを、歓迎するような、あるいは満足するようなものとしている。この眼差しは、したがって、厳しいもの、恐ろしいものとは捉えられていない。画の中では既にテッサリアの地が現れつつあり、河／河神は喜んで新たに開かれた水

路を流れていく (II.14.3)。この河はペネイオス河で (II.14.1)、したがって開かれた隙間は、ここで名を出されてこそいないものの、テンペ渓谷である。

このテッサリア形成譚はヘロドトスも記している<sup>(16)</sup>。それによればテッサリア地方はかつて四方を高山で囲まれており行き場のない河水によって全土が海のようにであったが、テンペ渓谷を開いてその水を排出したのがポセイドンだったと現地住民の間で伝わっているという。これらは II.14 の記述と概ね一致しており、画家 (あるいはフィロストラトス) が伝承に沿って絵画を構成したことが裏付けられる。なおヘロドトスは、渓谷の断裂を、その裂け方から地震によるものと判断し、地震を起こす神としてのポセイドンを信じる者ならば渓谷の形成をポセイドンに帰するのはもっともであると結論を下している。

『エイコネス』II.14 では地震について触れられていないが、後に詳しく見るように、II.17.4 の記述から遡れば、このテッサリア形成譚と地震が結びつけられていることが明らかになる。

## I.2. 「パライモン」 (II.16.)

「パライモン」は、コリントス地峡部 (イストモス) での供犠を描いている。この犠牲式については、語り手がまず神話的背景を少年に説明する (II.16.1)。すなわち、イノの身投げと、メリケルテスのパライモンへの神格化である。

画中ではイルカがメリケルテスの遺骸をその背に乗せて、犠牲を捧げる人々のもとへと、中でもシシュポスを目指して運んでいる (II.16.2)。語り手の説明では、メリケルテスは眠っているかのように描かれており、イルカが背に乗せて平らかな海を滑るように音もなく彼を運んでくる。そしてそれをイストモスはその地を開いて迎える様子は次のように描写されている。

彼の到達につれてイストモスの最も深い聖域を割り開く (ρήγνυταί)、ポセイドンの分けた (διασχούσης) 大地として。私が想像するに、彼はシシュポスに子供の到着を告げ、彼に犠牲を捧げるように言いつけてい

るのだろう。

(II.16.2.)<sup>(17)</sup>

語り手は続いて画中の犠牲式がパライモンの秘儀であると説明し、次のようにシシュポスの描かれ方に注目する。

というのも教義 (λόγος) はまさしく神聖かつ秘密なのだ、この秘儀を賢明なる (σοφοῦ) シシュポスの執り行ったがゆえに (ἀποθειώσαντος αὐτόν)。思うにその賢明さを、描かれ方 (εἶδος) へ注意を向ければ直ちに見て取れる。

(II.16.3.)<sup>(18)</sup>

次いで語り手はポセイドンの描かれ方に目を転じ、以下のように述べる。

ポセイドンの描かれ方 (εἶδος) は、もしもまさにギュライの岩やテッサリアの山を砕き割ろうと (ρήξειν) しているところだったならば、恐ろしく、一撃を加える (πλήττων) 者として描いただろう。だが客人メリケルテスを、大地に抱こうと迎えており、その寄港を微笑み、メリケルテスの家となるふところを開くよう (ἀναπετάσαι) イストモスに命じているような描写である。

(II.16.3.)<sup>(19)</sup>

語り手によれば、この絵においてポセイドンは恐ろしげに描かれてはいない。むしろメリケルテスを迎え入れる優しい微笑みの表情を浮かべているとされる。語り手は、画中の秘儀部分の説明からシシュポスの描かれ方に視線を集中し、特にその性質 (賢明さ) の表れに注意を向ける。そこからポセイドンへ転じて、表情の説明に移ることで、聞き手がここでのポセイドンの性質 (恐ろしくない) にも注意を向けるよう促しているといえる。

なお、引用中のギュライの岩 (難破した小アイアスが最後にすがって岩もろともポセイドンに打ち砕かれる岩) は II.13 「ギュライ (ΓΥΡΑΙ)」で、テッサリア

の山は既に扱った II.14 「テッサリア」で描かれている。これらを含めた構成の連関については後述する。

### I.3. 「島々」2 番目の島 (II.17.3.)

II.17 は「島々」と題されており、文字通り複数の島々が描かれた絵画について語られている。ここでの叙述の特徴は、あたかも船に乗って島々の間を抜けるながら眺めるかのように (II.17.1) 解説がなされることだ。この絵画についての説明は、1 枚の画面に全てが描かれていたことを想像するのが困難なほど多くの要素を含んでおり<sup>(20)</sup>、また語り手による説明も島ごとになされていることから、本稿では、2 番目の島 (II.17.3) と 3・4 番目の島 (II.17.4) に分けて扱う<sup>(21)</sup>。

「島々」の 1 番目に述べられる切り立った島に続く島 ( $\nu\eta\sigma\omicron\nu\ \tau\eta\nu\ \epsilon\phi\epsilon\chi\eta\varsigma\ \acute{\upsilon}\pi\tau\iota\alpha\nu$ )、すなわち 2 番目の島は、平らかで土壤に富み、島に居住する漁師と農夫が互いの収穫物を取引している (II.17.3)。そしてこの島にはポセイドン像<sup>(22)</sup>が立てられている。

彼らはそこに、大地からの収穫を願って、くびきつきの鋤に乗った地を耕すポセイドンを建立した。だがこの像はあまり陸のポセイドンであるとしないよう。鋤に船の舳先が付いており、大地を割っている ( $\rho\eta\gamma\gamma\upsilon\sigma\iota\nu$ )、あたかもそこを航海するかのよう。 (II.17.3.)<sup>(23)</sup>

語り手は画中のポセイドン像を、大地の恵みを願って建立された地を耕すポセイドン (大地の伴侶としてのポセイドン)<sup>(24)</sup>と説明している。その一方で、完全に陸のものとして作られてはいないことも指摘する。その台座としての鋤が船の舳先をあしらったものであり、したがって大地を割り開いて航海しているかのように見えると述べる。この「大地を割る」という表現を用いた解説は、続く解説が割れた島についてであることを準備する叙述といえる。

## I.4. 「島々」3・4番目の島（II.17.4.）

続く3・4番目の島は、もともとは1つの島だったものが、今は2つの島に分かれていると説明される<sup>(25)</sup>。

続く2島はかつて共に1つだったが、海によって分かれたれ（*ῥαγείσα*）、  
その間を河ほどの幅で離された（*ἀπηνέχθη*）。（II.17.4.）<sup>(26)</sup>

単に2つの島が接近しているのではなく、上記のようにもともと1つであったということが、描かれ方から読み取れると語り手は言う。

描かれ方で君に次のことがわかるだろう、ほうや、島の裂け目（*ἔσχισμένα*）の似ていて互いに一致するのを、思うに君にも見て取れるね、剥がれたところにくぼみがくっついていたように。（II.17.4.）<sup>(27)</sup>

続いて語り手は、このような切断された地形の例を示す<sup>(28)</sup>。

これをエウロパはかつてテッサリアのテンベのあたりで被ったのだ。そこを開いた（*ἀναπτύξαντες*）地震が（*σεισμοὶ*）山々の切断面での一致を刻みつけたし、今日でも、同じような岩と岩の互いの一致が見えるだろう。（II.17.4.）<sup>(29)</sup>

切断面や岩と凹凸の一致が、もともと1つだったものが分かれたことを示していると語り手は述べ、加えて現地の森の様子もこれを証立てるとも付言している（II.17.4.）。ここで語り手はII.14で述べたようなポセイドンの関与を説明してはいない。むしろ、地勢の描写に集中し、またそれが地震によるものであると述べている。だが、後述のように、例示されるのがテンベであることと、直前のポセイドン像の描写などから、読者（あるいは聞き手）はそこにポセイドンを思い浮

かべることであろう<sup>(30)</sup>。むしろ、II.14 とこの II.17.4 との間で、描写が重複しないように、説明が振り分けられているとも考えられる。

以上の例示から語り手は島の描写に戻る。

同じようにこのようなことをこの島も被ったと考えられる。他方、2 島を繋ぐ橋を (ζεύγμα) 水路の上に据えている。これにより 1 つであるように表現され、橋の (ζεύγματος) 下を航行する一方で、荷車で通行している。思うに君にも徒歩で行く人々と航海者たちが行き交うのが見えるだろう。 (II.17.4.)<sup>(31)</sup>

すなわち、テンペが地震によって破断したのと同様に、この島も地震によって 2 島に割られたとする。

さらに、かつては 1 つであった島が分かれた 2 島として描かれている一方で、語り手は 2 島がまた 1 つに繋がれていることを指摘する。単に繋がっているだけでなく、1 つの島であるかのように描写されていると述べられる。2 島が 1 島であることは、交通路による物理的な接続だけによってではない。そこを行き交う人々によって、人間の活動における一体感をも伴っている。II.17.4 冒頭で「海によって分かれた」と述べられた、島を物理的に隔てているその「河ほどの幅」の海までもが、水路として、行き交う人々の活動を支えている。

以上で地を割るポセイドンおよび地形変化に関する記述の確認を終えた。続く章ではこれらの構成上の連関を明らかにする。

## II. 地を割るポセイドンの連関

### II.1. ῥήγνυμι の使用箇所

本稿で扱っている「テッサリア」、「バライモン」、および「島々」の II.17.3-4 で、地を「割る」ことに主に用いられている動詞が ῥήγνυμι である。この範囲では、ῥήγνυμι は、以下の 6 例が用いられている<sup>(32)</sup>。なお、(b) で用いられて

いるのは接頭辞を冠した ἀναρρήγνυμι である。この貫く動きが強調されている ἀναρρήγνυμι も同系統の表現として採用する。

- (a) 「テッサリア」でポセイドンがテッサリアの山を割ろうと意図していることの説明 (II.14.1.)
- (b) 「テッサリア」で画中の山を割るポセイドンの動作の説明 (ἀναρρήγνυμι) (II.14.2.)
- (c) 「パライモン」でイストモスの聖域を開く描写 (II.16.2.)
- (d) 「パライモン」でポセイドンがギュライの岩やテッサリアの山を割ろうとしているならばという仮定 (II.16.3.)
- (e) 「島々」の2番目の島で船の舳先付きの台座に乗ったポセイドン像が大地を割って航海しているように見えるという描写 (II.17.3.)
- (f) 「島々」の3・4番目の島で海によって2島が分かたれているという説明 (II.17.4.)

## II.2. テッサリア形成譚を中心とする叙述内容上の連関

上記6例のうち最後の (f) では、割っているもの (動作主) は海である (ὕπὸ τοῦ πελάγους) (II.17.4)。 (f) のある II.17.4 の3・4番目の島の記述では、テッサリアのテンペ溪谷を例示する際も含めて、ポセイドンは一度も言及されない。だが、(1) ここに至るまで頻出している動詞 ῥήγνυμι の使用、(2) 動作主が「海」であること、(3) テッサリアの地勢変化へのポセイドンの関与が既に「テッサリア」で説明されており「パライモン」でも再び触れられている<sup>(33)</sup> こと、(4) 直前の2番目の島の末尾においてポセイドン像が地を割っているように見えるという解釈を語り手が提出していることから、聞き手 (あるいは読者) は (f) における島の分割にもポセイドンの権能が伏流していると感じることができる。

特に、(e) 航海するかのように大地を割るポセイドン像と、(f) 海によって分かれた島についての言及は、隣接する2文でなされている。したがって (f)

での「海」はポセイドンを比喩的に想起させるうえ、むしろこの2文によって2番目の島と3・4番目の島についての叙述がひと続きに架橋されているのである。

また、3・4番目の島の描写におけるテンペ溪谷の例示は「テッサリア」でのポセイドンによる山割りの絵を想起させるにとどまらない。II.17.4の例示でのテッサリア形成譚の特徴はむしろ、前述のようにポセイドンに触れていないだけでなく、テッサリアでこの島と同じようなことが起こった(割れた)ということ以外には「テッサリア」と共通する叙述をおこなわないことにある。すなわち、テンペの地名、地震、裂け目の両面の一致は「テッサリア」では触れられていない。

「テッサリア」ではテッサリアという地域名と河川名が述べられており、また本稿においてヘロドトスらの例を引いたようによく知られた地名であって、地誌を把握している多くの者にとって、テンペの名を出す必要はない。ただし聞き手が10歳の少年であることを考慮すれば、II.17.4の例示においてテンペの名を補うことには教育的な効果が期待される。したがって、II.17.4での地勢変化要因としての地震と、裂け目の両面の一致への言及も、「テッサリア」での解説に対する補いとみなすことができる。語り手は「テッサリア」では画中に描かれている限りのテッサリア形成譚およびその神話的背景と、ポセイドンや河神などの描かれ方に注目した解説を施しており、鑑賞上、それ以上の補足的説明は不要であった。しかし「島々」において改めて、テッサリア形成譚と共通項のある分かれた島の解説の中で、聞き手(読者)は「テッサリア」の絵の補足説明を受けていることになる<sup>(34)</sup>。

よって、「テッサリア」、「パライモン」、および「島々」の2番目の島、3・4番目の島の全てに、ポセイドンの割り開きが関与しているといえる。また、テッサリアを割るポセイドンが「パライモン」および「島々」の3・4番目の島部分で言及されていることから、「テッサリア」、「パライモン」、「島々」の2番目と3・4番目の島を、地を割るポセイドンについての一連の記述として捉えることができる。

### II.3. 地を割るポセイドンの穏やかな側面

ここでポセイドンの描かれ方に観点を転じれば、共通して穏やかな性質をも有していることを指摘できる。

「テッサリア」において山を割るポセイドンは、その体勢から、一撃の威圧を全身で保つように描かれている（II.14.2）。と同時にこのポセイドンは大地を歓迎しているように描かれてもいる（II.14.2）。そして河と河神もポセイドンによる流れの変化を喜んで受け入れている（II.14.3）。絵画全体としても、語り手はテッサリア形成譚を喜ばしいこととして解説しており、画中のポセイドンの威圧と歓迎の二面を提示している。

「バライモン」でのポセイドンは、語り手の解釈によれば、シシュポスにメリケルテスの到着を告げるとともに犠牲を捧げるよう命じている（II.16.2）。シシュポスが犠牲に用いている雄牛はポセイドンの牧群からのものである（II.16.3）。ポセイドンはシシュポスにこれらの手はずを整えさせると同時に、メリケルテスの到着に伴ってイストモスを割り開いている（II.16.2）。画中のポセイドンは、メリケルテスを迎え入れるために微笑みをたたえている（II.16.3）。この微笑みは、穏やかな表情といえよう。

「バライモン」では、この表情について語り手が、「もしもまさにギュライの岩やテッサリアの山を砕き割ろうとしているところだったならば、恐ろしく、一撃を加える者として描いたであろうが」（II.16.3）と、恐ろしい者として描かれる場合と対比している。この例のどちらも、先行する「ギュライ」「テッサリア」にて語り手が解説を加えた絵画に描かれており、ここでも語り手は先行して扱った絵画を聞き手に想起させている。テッサリアの山を割るポセイドンについては、「テッサリア」では威圧と歓迎の二面が描かれていることを既に指摘した。恐ろしさは、この山を割ろうとする威圧に係る側面を指している。すなわち、「テッサリア」においては、砕き割る動作を行う者としてのポセイドンは威圧的で恐ろしいが、その結果としての地勢変化のもたらし手としてのポセイドンは穏やかなのである。

並列されている「ギュライ」でのポセイドンはどうであろうか。「ギュライ」の絵画は、嵐の中でギュライの岩に取り付いた小アイアスを、ポセイドンが岩を震わせて追い落とそうとする様を描いている(II.13)。ギュライの岩に向きなおったポセイドンは、「恐ろしい、ああぼうや、猛嵐そのもので、髪が逆巻いており」(II.13.1)<sup>(35)</sup>と述べられるほどに恐ろしく描写されている。そして、三叉の矛を放って岩もろとも小アイアスを打ち滅ぼそうとしている(II.13.2)。ただし、ギュライの岩の残りの部分の存続も語られている(II.13.2)。「テッサリア」及び「パライモン」の記述から遡って解釈するならば、このポセイドンの恐ろしさは小アイアスに対する動作の恐ろしさとして際立つ。と同時に、言うまでもなく、「ギュライ」は地勢変化を扱った絵画ではないことも確認される。

「島々」においては直接ポセイドンの性質が述べられてはいないが、前述の通り2番目の島のポセイドン像は地を耕すポセイドンである。すなわち大地の恵みの願いを受けている。また3・4番目の島では、島が分かたれたまさにその分離による現在の2島の一体感、すなわち行き交う人々の活況が語られている。

これらを通覧すれば、「テッサリア」、「パライモン」、2番目の島と3・4番目の島において、相互参照が可能な仕方で、地勢変化に係るポセイドンは穏やかな側面ないし恵みをもたらす側面を伴って描かれている。大地が割れることによる地勢変化の結果も、喜ばしいものと位置づけられていることがわかる。

以上の叙述内容上の連関を改めてまとめれば、まずテッサリア地方への言及が「テッサリア」、「パライモン」および3・4番目の島でなされることにより、一方では後二者での記述において「テッサリア」の内容を想起させ、他方で3・4番目の島での地震と裂け目の一致などの地勢的描写が「テッサリア」への補足説明ともなる。同時に、2番目の島のポセイドン像は、ポセイドンについて触れていない3・4番目の島にもポセイドンの権能の係りを感じさせる。これらにより、「テッサリア」、「パライモン」、2番目の島、3・4番目の島を、ポセイドンによる地勢変化に関する観点から括って読むことができる。

さらに「テッサリア」「パライモン」2番目の島でのポセイドンは穏やかな、あるいは恵みを与えるものとして描かれており、その穏やかさ／恵みは開かれた土地あるいは土地の恵みとの関連で語られている。「パライモン」で言及されるとおり「テッサリア」と「ギュライ」では恐ろしいポセイドンも描かれている。その恐ろしさは打撃ないし破壊に関するものであり、併せて読むならば、地勢変化の一撃をもたらすポセイドンの恐ろしさと、地形変化の後のポセイドンの穏やかさと恵みが対比的に強調される。これらの連関を語のレベルで補強しているのが、ρήγνυμιの使用である。

#### II.4. 2番目の島と3・4番目の島の記述における叙述構造上の連関および「島々」における「恵み」

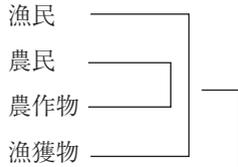
前節で述べた叙述内容上の連関に加え、「島々」の2番目の島と3・4番目の島の記述(II.17.3-4)には構造上の連関も指摘できる。

2番目の島の住人の描写はABBA型の構造となっている(II.17.3)。すなわち、島の住民として[漁民]→[農民]の順で述べられ、彼らが交換する産物は[農作物]→[漁獲物]の順で述べられている。

3・4番目の島でも、人々について、その末尾に同様の、人と物の順序は反転させた構造が見られる(II.17.4)。2島の間で行き交う人々を、語り手は[航行]→[荷車]の順で言及した後、子供には[徒歩の人々]→[航海者たち]、すなわち橋を行く人々と水路を行く人々の順で見取らせている。また2島の間で行き交う人々についての叙述部分は、2島が1つの島であるかのように表現されていると語り手が解釈する部分でもある。これを踏まえれば、2番目の島と3・4番目の島の住人を、それぞれ[1つの島の住人]と[1つ(に見える)島の住人]とみなし、住人への言及の仕方に同一の構造を見て取ることができる。

その間に挟まれて配置される3・4番目の島についての記述は、[2つに分かれた島]→[分かれたテンベ溪谷]→[2つに分かれた島]の順でなされている(II.17.4)。

II.17.3. 1つの島の住民

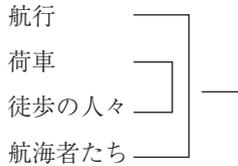


II.17.4. 2つに分かれた島

分かれたテンペ溪谷 -----> 「テッサリア」 ← 「パライモン」

2つに分かれた島

1つ（に見える）島の住人



図：II.17.3-4 の叙述構造上の連関

したがってこれらを整理すれば、II.17.3-4 は図に示す叙述構造を有しているといえる。2番目の島と3・4番目の島についてのそれぞれの説明をまたぐかたちで図のような構造的叙述を看取できることは、既に述べたように、それらについての説明を繋ぐ2文（II.17.3最終文とII.17.4冒頭文）がポセイドンと割るイメージによって架橋的役割を果たしていることから補強される。この構造の中央に置かれたテンペ溪谷の例示は、「テッサリア」、ひいては「パライモン」との内容上の接続点でもある。よって、2番目の島と3・4番目の島の記述は、テンペ溪谷（地震による破断）の例示を挟み込む形で、一方は地を耕す（航海するかのように割る）ポセイドン像の傍らで大地と海の収穫を交換する人々の島、他方はかつて地震によって分断され現在は橋と水路で行き交う人々の島、として、地を割るポセ

イドンに関して類比的な一連の記述となっている。

図のように II.17.3-4 が地を割るポセイドンを中心とした一連の記述として述べられることで、前節で見たポセイドンによる恵みのイメージは、3・4 番目の島まで敷衍される。

すなわち 2 番目の島では地を耕すポセイドン像（同時に地を割り航海するような形態の像）が作物の恵みを祈願されている。そして、住民たちの地の作物と海の獲物の交換は、地と海双方の収穫と共に、地と海の交流をも描いている。

これに続く 3・4 番目の島の描写は、地を割り航海するようなポセイドン像への言及の直後に置かれ、同じく ῥήγγυμι を用いて、海によって 2 つに分かたれたという表現から開始する。島の分離はテンペ渓谷同様に地震によるものである。したがって、3・4 番目の島では、そこに直接言及されてこそいないポセイドンの権能が、分離の背後に伏流している。本稿 I.4 末尾でも述べた通り、この 2 島の一体感を醸成する人間たちの行き交いは、橋と水路（海）、つまり島の分離によって結果的にもたらされているものである。1 つの島が地震によって海で分かたれたが、そこでは橋と水路で、住人たちの陸上だけでなく海上も含めた行き交いが活況を示している。この活況も（ポセイドンの権能を背後に感じられる）地勢変化の結果としての恵みである。その描写が、2 番目の島での漁民・農民・農作物・漁獲物に対して、航行・荷車・徒歩者・航海者と述べられることによって、大地と海、人と物の対比とともに、恵みと交流のイメージがいつそう喚起される。

さらにこの 3・4 番目の島では、恵みは「テッサリア」でそうであったようには）純粹に地勢変化のみに帰されているのではない。地勢の変化と人間の営みの協働の成果として、人間にとっての恵みが実現している<sup>(36)</sup>。分かたれた 2 島がひとつに見える理由として語り手が指摘したのは橋（および水路、荷車と船、それらの行き交い）の存在であった（II.17.4）。地勢の変化と、その後の人間の営みの双方があって、島は現在の様相を示している。

結論へ進む前に、フィロストラトス作とも目される「ディアレクシス 2」<sup>(37)</sup>がこの点に半ば共通する視点を提供することに触れておく。

陸から島が離され（ἀπορραγείσα）、島に陸が付けられ、オリュンポス山からペネイオス河が流し出されるのは、ピュシスのみによるものでもノモスのみによるものでもない。我々が協働（συμβεβηκός）と呼ぶなにかしら両者の間であり、それがノモスをピュシスに似せ、ピュシスをノモスへ向かわせるのである。（「ディアレクシス 2」6.）<sup>(38)</sup>

この記述から、「島々」と「テッサリア」を想起することができよう<sup>(39)</sup>。ピュシスがノモスに海や空や星を与え、ノモスがピュシスに耕作や航海や天体論を与える、といった記述（「ディアレクシス 2」4）も、自然と人間の相補的な関係の例示として、2 番目と 3・4 番目の島の陸と海の人々に対応させることができる。自然と人為を対立させるのではなく補い合うものとして捉える視点は、2 番目と 3・4 番目の島の状況の解釈に資するであろう。

## 結論

『エイコネス』中のポセイドンに係る地勢変化記述は「テッサリア」「パライモン」および「島々」の 2 番目と 3・4 番目の島に集中して現れており、叙述の内容と構造における連関から、相互に参照して読むことができる。これらに「ギュライ」における地勢変化についてはないポセイドンの描写を併せ、ポセイドンと地勢変化についての語りは、各絵画の鑑賞にあたり、絵画間の関係に注意を促し、鑑賞者がそれらを結び付けて解釈できるようになされている。換言すれば、『エイコネス』構成上の連関の表れである<sup>(40)</sup>。

そこに示されているのは、大地が割れるという地勢変化へのポセイドンの関与であり、また地勢変化に係る恩恵である。ポセイドンの下す一撃とそれによる破壊が恐ろしいものとされていると同時に、ポセイドン（あるいは地震）に起因す

る地勢変化は恵みでもあり、それをもたらしたポセイドンが恐ろしいばかりではないという語られ方は、3世紀の地中海社会における地勢変化の受け取られ方（あるいはフィロストラトスによる受け取らせ方）の一端であろう。すなわち、地勢変化をもたらすポセイドンの一撃（ないしその表れとしての地震）は恐ろしいが、時間軸を長期にして見たとき、その変化は後に恩恵をもたらすという両側面である。さらにその恵みの実現には、人間の営みも関与しうるのである。

## 注

- \* 本稿は科学研究費補助金（研究課題番号：24652040）の助成による研究成果の一部である。また、本稿の執筆にあたり、有益な助言、加えて拙い筆者の誤認の指摘をしてくださった2名の匿名の査読者、ならびに国際基督教大学キリスト教と文化研究所の関係者に感謝する。
- (1) 本稿では他のフィロストラトスについて触れないため、以下、特に必要な場合を除いては『エイコネス』の作者に「大」を冠さずに「フィロストラトス」と呼ぶ。
  - (2) 本稿では小フィロストラトス『エイコネス』を扱わないため、大フィロストラトスのそれを単に『エイコネス』と呼ぶ。また、この『エイコネス』の出典箇所を表記する際に作品名を略する。
  - (3) 『エイコネス』中の1人称の語り手を、作者としてのフィロストラトスとの区別から、本稿では「語り手」と呼ぶ（cf. Elsner (2000) p.254 n.6; Webb (2009) p.188）。
  - (4) 『エイコネス』全体の構成については cf. Baumann (2011) pp.91-164, 195-203。
  - (5) Bryson (1994) p.255.
  - (6) 『エイコネス』の語り手にはソフィスト的な性格付けが与えられ、叙述にもソフィスト的な側面が強く見られる（Anderson (1993) pp.147ff.; Beall (1993); Elsner (1995) pp.25ff.; Leach (2000) p.241; Newby (2009) esp. pp.322-324; Dufallo (2013) pp.13, 247-248）。
  - (7) Swain (2009) pp.34-35, 40; Platt (2011) p.217; Dufallo (2013) pp.13, 247ff., esp. 249-250.
  - (8) 『エイコネス』の語りは聞き手である少年に呼びかけ、また少年の疑問を喚起しそれに応えるようになされる点で、主として少年に向けたものであり、テキスト内では読者の存在を前提としない。ただし、共に話を聞き、曖昧な部分に疑問を呈する役割を期待されている若者たちも付き従っている。このような場面設定が、読

者が絵画と絵画群をありありと想起するための巧妙な舞台装置となっているといえる (Leach (2000) pp.242-243; Elsner (1995) p.38; Elsner (2000) p.260; Webb (2009) pp.187-188)。

- (9) Elsner (2000) pp.256ff., esp. pp.256-257, 264.
- (10) ῥήξει οὖν ὁ Ποσειδῶν τῇ τριαίνῃ τὰ ὄρη καὶ πύλας τῶ ποταμῶ ἐργάσεται. なお引用テキストには Kalinka and Schönberger (2004) を用い、訳出にあたっては Fairbanks (1931) も併せて参考にした。
- (11) καὶ διήρται μὲν ἡ χεὶρ εἰς τὸ ἀναρρῆσαι, τὰ δὲ ὄρη, πρὶν πεπληχθαι, δίσταται τὸ ἀποχρῶν τῶ ποταμῶ μέτρον.
- (12) τὰ δεξιὰ τοῦ Ποσειδῶνος ὁμοῦ καὶ ὑπέσταλται καὶ προβέβηκε καὶ ἀπειλεῖ τὴν πληγὴν οὐκ ἀπὸ τῆς χειρός, ἀλλ' ἀπὸ τοῦ σώματος.
- (13) Fairbanks (1931) p.185 n.4 は振りかぶり動作による全身の後ろへの反りと、身体のみねりによって左半身よりも右半身が前方に出て見える体勢を想定しており、Kalinka and Schönberger (2004) p.416 ad II.14.2 もこれに同意している。
- (14) γέγραπται δὲ οὐ κυάνεος οὐδὲ θαλάττιος, ἀλλ' ἠπειρώτης.
- (15) τῶ τοι καὶ ἀσπάζεται τὰ πεδία καὶ ὀμαλὰ ἰδῶν καὶ εὐρέα, καθάπερ θαλάττας.
- (16) ヘロドトス『歴史』VII.129. また、ストラボンはこの地域についてさらに詳しく述べている (ストラボン『地誌』IX.5.1-2, 19-20)。それによれば同時代においてもテッサリア平原を流れるペネイオス河はしばしば氾濫し、広い地域が冠水する。またストラボンが引く説によれば、テンペ渓谷が開く以前はこの平原は湿地状であった。彼も渓谷の成因を地震と断定する。さらにセネカにも同様の記述が見られる (セネカ『自然研究』VI.25.2)。またピンダロス『ピュティア』IV.246 へのスコリアでの同様の言及については cf. Kalinka and Schönberger (2004) p.416 ad II.14.1。
- (17) προσιώντι δὲ αὐτῶ ῥήγνυται τι κατὰ τὸν Ἴσθμὸν ἄδυτον διασχούσης τῆς γῆς ἐκ Ποσειδῶνος, ὃν μοι δοκεῖ καὶ Σισύφῳ τούτῳ προειπεῖν τὸν τοῦ παιδὸς εἰσπλοῦν καὶ ὅτι θύειν αὐτῶ δέοι.
- (18) σεμνὸς γὰρ ὁ λόγος καὶ κομιδῆ ἀπόθετος ἅτ' ἀποθειώσαντος αὐτὸν Σισύφου τοῦ σοφοῦ· σοφὸν γὰρ ἦδη που δηλοῖ αὐτὸν ἡ ἐπιστροφή τοῦ εἵδους. なお、LSJ は“ἀποθειώω”の用例として『エイコネス』16.2 を挙げているが、ここで引用した II.16.3 に該当する。
- (19) τὸ δὲ τοῦ Ποσειδῶνος εἶδος, εἰ μὲν τὰς Γυρὰς πέτρας ἢ τὰ Θετταλικά ὄρη ῥήξιν ἔμελλε, δεινὸς ἄν που ἐγράφετο καὶ οἶον πλήττων, ξένον δὲ τὸν Μελικέρτην ποιοῦμενος ὡς ἐν τῇ γῇ ἔχοι, μειδιᾷ καθομιζομένου καὶ κελεύει τὸν Ἴσθμὸν ἀναπετάσαι τὰ στέρνα καὶ γενέσθαι τῶ Μελικέρτῃ οἶκον. なお、パウサニアス『ギリ

- シア記』 I.44.7-8, II.1.3, 6, II.2.1 ではイストモスとメリケルテス／パライモンについての比較的詳しい言及がある。特に『ギリシア記』 II.2.1 で触れられているパライモン神殿の地下の奥の墓所は、『エイコネス』でイストモスに開かれた「最も深い聖域」(II.16.2) および「ふところ」(II.16.3) に対応する (cf. Kalinka and Schönberger (2004) p.423 ad II.16.2)。
- (20) Elsner (2000) p.264; Leach (2004) pp.282-283. II.17 全体の構成については cf. Kalinka and Schönberger (2004) p.425 ad II.17; Baumann (2011) pp.76-87。
- (21) なお、Kalinka and Schönberger (2004) は本稿で3・4番目の島と呼ぶ部分をまとめて「3番目」として扱っている (cf. p.425 ad II.17)。
- (22) なお、ヴァチカン・グレゴリアーノ世俗美術館 (ラテラノ美術館) 所蔵 (10315) の、船の舳先に右足を乗せたポセイドン像が、現存する類例である (Benndorf and Schenkl (1883) p.93 ad I.14; Fairbanks (1931) p.196 n.1; Kalinka and Schönberger (2004) p.429 ad II.17.3; LIMC “Neptunus” 14 (= “Poseidon” 34))。
- (23) Ποσειδῶ δὲ τουτονὶ γεωργὸν ἐπ’ ἀρότρου καὶ ζεύγους ἴδρυνται λογιούμενοι αὐτῶ τὰ ἐκ τῆς γῆς· ὡς δὲ μὴ σφόδρα ἠπειρώτης ὁ Ποσειδῶν φαίνοιτο, πρῶρα ἐμβέβληται τῷ ἀρότρῳ καὶ τὴν γῆν ῥήγνυσιν οἷον πλέων.
- (24) Cf. Kalinka and Schönberger (2004) p.416 ad II.14.2, p.429 ad II.17.3.
- (25) なお、II.17 の島々の絵はシケリア島北のアイオロス諸島 (リバラ諸島、現在のエオリエ諸島／リパリ諸島) を、この3・4番目の島はディデュメ島 (“双子” 島、現在のサリーナ島) を描いている可能性が指摘されている (Benndorf and Schenkl (1883) p.93 ad I.5; Fairbanks (1931) p.195 n.2, p.197 n.1; Kalinka and Schönberger (2004) p.429 ad II.17.4)。ただしディデュメ島は1つの島であり、したがってこの島についての描写には画家による (あるいはフィロストラトスによる) 意図的なデフォルメが想定される (これはこの島に特別なことではなく、神話的な状況を描きこむ他の島々や地域についても同様である)。
- (26) Αἱ δ’ ἐχόμεναι τούτων νῆσοι δύο μία μὲν ἄμφω ποτὲ ἦσαν, ῥαγεῖσα δὲ ὑπὸ τοῦ πελάγους μέση ποταμοῦ εὗρος ἑαυτῆς ἀπνέχθη.
- (27) τουτὶ δ’ ἔστι σοι καὶ παρὰ τῆς γραφῆς, ᾧ παῖ, γινώσκειν· τὰ γὰρ ἐσχισμένα τῆς νήσου παραπλησία σου ὄρας καὶ ἀλλήλοις ξύμμετρα καὶ οἶα ἐναρμόσαι κοῖλα ἐκκειμένους.
- (28) II.17 に散見されるこのようなある意味で碩学的な説明展開と多層化については cf. Baumann (2011) p.80 n.71, 72。
- (29) τοῦτο καὶ ἡ Εὐρώπη ποτὲ περὶ τὰ Τέμπη τὰ Θεταλικά ἔπαθε· σεισμοὶ γὰρ κάκείνην

ἀναπτύξαντες τὴν ἀρμονίαν τῶν ὄρων ἐναπεσημήναντο τοῖς τιμίμασι, καὶ πετρῶν τε οἴκοι φανεροὶ ἔτι παραπλήσιοι ταῖς ἐξηρμοσμέναις σφῶν πέτραις.

- (30) 加えて、言うまでもなくポセイドンはホメロス作品にもよく言及された地震の神でもある。たとえば1世紀のセネカは、初等の教育を受けた者ならばそれを知っていると述べているし（『自然研究』VI.23.4）、2世紀のアルテミドロスは夢判断にあたってポセイドンを地震と結び付けている（『夢判断の書』II.38）（山口（2011）p.9, p.22 n.20）。『エイコネス』の少年もホメロスを良く知っているべきと想定されており（I.1など。Cf. Leach（2000）p.242）、地震とポセイドンを容易に結びつけて考えることができたであろう。
- (31) τὸ μὲν δὴ τῆς νήσου πάθος τοιοῦτον ἠγώμεθα, ζεύγμα δὲ ὑπὲρ τοῦ πορθμοῦ βέβληται, ὡς μίαν ὑπ' αὐτοῦ φαίνεσθαι, καὶ τὸ μὲν ὑποπλεῖται τοῦ ζεύγματος, τὸ δὲ ἀμαξεύεται· ὄρας γάρ που τοὺς διαφοιτῶντας αὐτό, ὡς ὁδοιπόροι τέ εἰσι καὶ ναῦται.
- (32) なお、その他のρήγνυμιの用例についてはcf. Benndorf（1883）“index verborum”。
- (33) Cf. Kalinka and Schönberger（2004）p.416 ad II.14.1.
- (34) なおこの点から、「テッサリア」の絵画について、その画中では分かれた山々の間は互いに一致するようには描かれていなかったと想定することもできる。
- (35) φοβρός, ᾧ παῖ, καὶ χειμῶνος πλέως καὶ τὰς χαίτας ἐξηρμένος.
- (36) II.17における自然と人為についてはcf. Baumann（2011）pp.79-80。ただしII.17.4は詳しく扱っていない。
- (37) 「ディアレクシス2」およびその自然観についてはcf. Swain（2009）。本稿ではSwainによる英訳及び節分け（Swain（2009）p.41 n.32, pp.42-43）を参考・参照し、またテキストとしてBowie and Elsner（eds.）（2009）pp.356-357に“Appendix: Dialexis 2”として採録されたKayser, C. L.,（ed.）,（1871）, *Flavii Philostrati Opera II*. Leipzig: Teubner, pp.42-43のものを参照した。
- (38) ἠπεῖρου δὲ ἀπορραγεῖσα νῆσος καὶ νήσω ξυμβαλοῦσα ἤπειρος καὶ Πηνηϊὸς Ὀλύμπου διεκπεσῶν οὐ φύσεως ταῦτα οὐδὲ νόμου ἔργα· ἔστι τι ἀμφοῖν μέσον, ὃ καλεῖται συμβεβηκός, ὑπ' οὗ ὁ νόμος ὁμοιοῦται φύσει καὶ φύσιν μεταβάλλει ἐς νόμον.
- (39) Swain（2009）p.44。ただしSwainは、「ディアレクシス2」では河を通すのがポセイドンによってではなく人間によることを含意しているとする。
- (40) 本稿では扱っていないが、この連関の分析は今後、「島々」の続く部分や、次のII.18「キュクロプス」の解釈に資すると考える。「島々」の5番目以降の部分、とりわけ驚嘆（θαῦμα）との関連についてはcf. Leach（2000）pp.247-248; Newby（2009）pp.331-342。II.17とII.18の関連性についてはcf. Squire（2009）pp.352-353。

## 参考文献

- LIMC: Ackermann, Hans Christoph and Gisler, Jean-Robert (eds.), (1981-2009), *Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae*. Zürich: Artemis.
- LSJ: Liddell, H. G., Scott, R., Jones, H. S. and McKenzie, R. (eds.), (1996), *Greek English Lexicon.<sup>9</sup> with a revised supplement*. Oxford: Clarendon Press.
- 飯尾都人 (訳) (1991) 『パウサニアス ギリシア記』 龍溪書社。
- . (訳) (1994) 『ストラボン ギリシア・ローマ世界地誌 (I)』 龍溪書社。
- 土屋睦廣・大西英文・兼利琢也 (訳) (2006) 『セネカ哲学全集 4』 岩波書店。
- 松平千秋 (訳) (1972) 『ヘロドトス 歴史 (下)』 岩波書店。
- 山口京一郎 (2011) 「古代ギリシア・ローマ世界の地震」『ペディラヴィウム』 66号、ペディラヴィウム会、pp.8-31。
- Anderson, Graham, (1993), *The Second Sophistic: A Cultural Phenomenon in the Roman Empire*. London: Routledge.
- Baumann, Mario, (2011), *Bilder schreiben: Virtuose Ekphrasis in Philostrats Eikones*. Berlin: De Gruyter.
- Beall, Stephen M., (1993), “Word-painting in the ‘Imagines’ of the Elder Philostratus,” in *Hermes*, 121, pp.350-363.
- Benndorf, Otto and Schenkl, Karl, (1883), *Philostrati Maioris Imagines*. Leipzig: Teubner (fac. repr. in 2010 by Kissinger).
- Bryson, Norman, (1994), “Philostratus and the Imaginary Museum,” in S. Goldhill and R. Osborne (eds.), *Art and Text in Ancient Greek Culture*. Cambridge: Cambridge U. P., pp.255-283.
- Bowie, Ewen and Elsner, Jaś (eds.), (2009), *Philostratus*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Dufallo, Basil, (2013), *The Captor’s Image: Greek Culture in Roman Ecphrasis*. Oxford: Oxford U. P.
- Elsner, Jaś, (1995), *Art and the Roman Viewer: The Transformation of Art from the Pagan World to Christianity*. Cambridge: Cambridge U. P.
- . (2000), “Making Myth Visual: The Horae of Philostratus and the Dance of the Text,” in *Mitteilungen des Deutschen Archaeologischen Instituts Römische Abteilung*, 107, pp.253-276.
- Fairbanks, Arthur, (1931), *Philostratus: Imagines*. Cambridge, MA and London: Harvard U. P.
- Kalinka, Ernst and Schönberger, Otto (eds.), (2004), *Philostratos: Die Bilder*. Würzburg:

Königshausen & Neumann ((1968), München: Ernst Heimeran Verlag).

- Leach, Eleanor Winsor, (2000), "Narrative Space and the Viewer in Philostratus' *Eikones*," in *Mitteilungen des Deutschen Archaeologischen Instituts Römische Abteilung*, 107, pp.237-251.
- . (2004), *The Social Life of Painting in Ancient Rome and on the Bay of Naples*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Newby, Zahra, (2009), "Absorption and Erudition in Philostratus' *Imagines*," in E. Bowie and J. Elsner (eds.), pp.322-342.
- Platt, Verity, (2011), *Facing the Gods: Epiphany and Representation in Graeco-Roman Art, Literature and Religion*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Squire, Michael, (2009), *Image and Text in Graeco-Roman Antiquity*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Swain, Simon, (2009), "Culture and Nature in Philostratus," in E. Bowie and J. Elsner (eds.), pp.33-46.
- Webb, Ruth, (2009), *Ekphrasis, Imagination and Persuasion in Ancient Rhetorical Theory and Practice*. Farnham: Ashgate.

## Earth-opening Poseidon: Descriptions in *Eikones* II.14, 16, 17

YAMAGUCHI, Kyoichiro

Elder Philostratus' *Eikones* contains a series of ekphrasis of paintings concerning the division of land by Poseidon: II.14 "Thessaly," II.16 "Palaemon," and the second island and the third-fourth islands in II.17 "Islands." This article discusses the composition and links between these parts, concentrating on Poseidon and geographical change, along with their meaning.

The formation of the vale of Tempe by Poseidon is described in II.14 "Thessaly." Poseidon is in a threatening posture while breaking mountains, and his attitude to the emerging plain is welcoming. Also mentioned in "Palaemon" and the third-fourth islands, the story connects these three parts. The opening of the sacred depth of Isthmus of Corinth and its acceptance of Melicertes is depicted in II.16 "Palaemon," with Poseidon's order to open the land and his smile at Melicertes. The second island in "Islands" (II.17.3) does not contain a story of geographical change, but the statue of Poseidon in the painting is described as though it is sailing through the ground by breaking it. The third-fourth islands (II.17.4) were formerly joined as one, but were broken apart into two, like Tempe. Though the description of the islands does not contain Poseidon, the preceding island and the mention of Tempe having earthquakes recalls its source, Earth-opening Poseidon, or Earth-shaking Poseidon. At the same time, the way of illustrating Tempe here is differs from that in "Thessaly." Thus, the illustration in the third-fourth islands becomes a supplementary explanation for "Thessaly." These connections are supported by the verbal link with ῥήγνυμι 'to

break, break asunder.' The second island and the third-fourth islands also have a unity owing to its composition. These four parts of geographical stories allow us to read them in reference to each other.

Viewing the series on Poseidon and the division of land, we find that they share a connection to each other, and the image of the rather gentle grace of Poseidon or geographical change that sometimes shown long after its rupture. In addition, human activity could have participated in making the rupture appear graceful. In the third-fourth islands, the divided islands look unified due to a bridge, and wagons go over it, while ships sail under it.